

第六章・チャクダラの防衛

… 猛き塔

大風に踏みこたえしあの塔

テニスン

この章が取り扱うのは文明の前哨線でたびたび発生し、特に野蛮な部族に取り囲まれた広大な帝国の人々の歴史の中に頻繁に見られるエピソードである。科学の力で武装し、相互信頼の団結によって強化された兵士または入植者の小さな一団は、何千もの好戦的で容赦のない敵によって孤立した駐屯地を攻撃されることがある。通常、守備隊の勇氣と装備は、ロルクズ・ドリフト（*南アフリカ）、チトラル砦、チャクラダ、またはクリスタン（*ティラ近辺）のように、救援部隊が到着するまで持ちこたえることができる。しかし時には防衛側が圧倒され、サラガリ（*前述クリスタン）やハルツーム（*一八八五年のゴードン）のように後に物語る者が一人もいなくなることもある。—政治的または愛国的な理由ではなく、義務や栄光のためではなく—その貴い命そのものために戦う人／彼らが思うように行動ではなく、彼らがそうしなければならぬから戦う人々の光景には何か不思議に凄まじいものがある。常に土手を溢れさせ、彼ら全員を溺れさせる脅威たる野蛮主義の増水中の大洪水に対して、彼らは社会的進歩の堤防を守っているのである。そうした状況は臆病者を勇者にし、勇敢な人物には最も気高い英雄的行為と献身の機会を与える。

チャクダラ砦が守っているのは流れが速く、幅が広く、一年のほとんどの季節において手に負えない急流であるスワット川の通路である。それは山から約一〇〇ヤード離れた平野に突然立ち上がる岩石の円丘の上に建てられている。スケッチと写真は通常その上の小丘と建物のみを示し、それを見ると誰もが小さな砦の、絵に描いたような難攻不落の様に感銘を受ける。ただしそのバランスが頭でっかちであり、その防衛はその上に位置する威圧的な崖から見渡せることに気づかない場合の話である。その構築において遮蔽の原則は完全に無視されていた。信号塔の建っている山の尾根の上に立つことによって砦を見下ろし、発砲することができた。すべての開放空間を見渡すことができた。すべての胸壁が露出していた。ただし大砲を装備していない敵に対しては、無期限に保持できた／しかしすべての内部交通が銃火に晒されているという事実は駐屯部隊の防衛を苦しいものとし、徐々にその数が削られることによって要塞が奪取されてしまう可能性があった。

スワット川にかかる細く、揺れ動くワイヤーブリッジの長さは約五〇〇ヤードである。南端は小銃射撃の銃眼のある巨大な鉄の扉で閉じられている。側面には二基の石の塔があり、その一基にマキシム機関銃が取り付けられている。川の間には要塞化された円丘、強力な石の角堡（*防護壁の外に角状に突出した稜堡）、馬のための囲いからなる要塞本体

があり、銃眼のある壁と多くのからまった有刺鉄線で守られている。そして二〇〇ヤード離れた崖の上に信号塔がある。

この駐屯地は蜂起の発生時には第一一ベンガル槍騎兵隊の二〇人のスワールと第四五シーク隊の強力な二個中隊の約二〇〇人からなり、H・B・ラトレイ中尉の指揮下にあった。「実際の戦力は次のとおり。第一一ベンガル槍騎兵隊、サーベル二〇本。第四五シーク隊、ライフル一八〇丁。英国電信士二人／病院ハビルダー一人／ナイトク（*インド警察の下から二番目の階級）憲兵（第二四パンジャブ歩兵隊）一人／ジェマダール一人（ディリ徴税所）。英国軍将校―第四五シーク隊、ラトレイ中尉、ホイートリー中尉／V・ヒューゴ外科大尉／政治エージェント、ミンチン中尉。」蜂起が差し迫っているという噂がますます高くなり、七月末に近づくとこの将校は部下に警報とともに持ち場に就く訓練をさせ、また万一のために必要と思われる準備をした。二三日、彼はD・A・A・G・から公式の警告を受け取った。「代理―補助―將軍副官。確かに、この代理―補助―補給係將校という驚くべき肩書は、より賢明で適切な用語「旅団副官」と「旅団補給係將校」に変更した方が有益であろう！」ハーバート少佐は部族民の蜂起を「ありうるが可能性は低い」と評した。その後、砦ではすべての予防措置が行われた。二六日、外でスケッチをしていたセポイが大集団の部族民が谷へ向かって進んでおり、彼自身がコンパス、双眼鏡といくらかの金を奪われたというニュースとともに駆け込んできた。

しかし混乱して切迫した状況において、マラカンド守備隊のイギリス人將校は駐屯地の防衛のためにすべての軍事的予防措置を講じはしたが、リボルバーだけで武装して谷を自由に騎行する習慣は放棄しなかった。また、彼らは娯楽をやめなかった。二六日の夕方、ラトレイ中尉はいつものようにポロをするためにカルへ行った。試合が終了したとき、彼は二人のスワールが急いで持ち込んだ手紙を受け取った。チャクダラのもう一人の將校であるホイートリー中尉からであった。それは大人数のパシヤン人が旗を立てて砦に向かっていているという警告だった。すぐに彼は全速力で帰途につき部族民の大きな集団の近くを通り過ぎたが、彼らはどういふわけか彼を気に留めなかった。そして安全に砦に到達した。ギリギリで間に合ったのである。恐ろしい大勢の男たちが砦に迫っていた。彼はマラカンドの幕僚將校に電報を送り、攻撃が差し迫っていることを報告した。その直後、敵によってワイヤーが切断され、小さな守備隊は戦闘状態に入った。

ディリのカーンの徴税所長であるハビルダーは実際のいかなる攻撃の際にも向かい側の丘に火を灯して警告することを政治局と約束していた。一〇…一五に一つの炎が立ち上がった。それは信号であった。警報が鳴った。守備隊はその持ち場に行った。しばらくの間沈黙があり、そして暗闇から一斉射撃が始まり、八月二日まで止まらなかった。すぐに砦の西面への攻撃のために前進してくる部族民の姿が見えるようになった。防御側は効果的

に発砲した。敵は勢いよく前進してきた。しかしその損失は深刻であった。やがて彼らは撃退されて退却した。

二回目の攻撃はすぐに北東の角に対して行われ、再び守備隊に打ち負かされた。午前四時に騎兵隊の囲いに三回目の攻撃が行われた。部族民はハシゴを担ぎ、大きな決意とともに前進してきた。致命的な銃火が彼らを迎えた。その後、彼らは撤退し、包囲戦の最初の夜は散漫な射撃によって終了した。守備隊は一晩中自らの持ち場に留まった。夜が明けると敵が北西の丘に撤退しているのが見られ、彼らはそこから絶え間ない銃撃を続けた。防側側の兵士は石の壁で守られていたが、銃弾が絶え間なく中に入って来た。しかし多くの兵士は不思議なほど被弾しなかった。

一方、マラカンドでは激しい攻撃を受けていたにもかかわらず、チャクダラの小さな隊に救援隊を送ることが決定されていた。ライト大尉と第一ベンガル騎兵隊の四〇人のスワール、そしてマラカンドの輸送将校である第二ボンベイ擲弾兵隊のベイカー大尉は二七日の夜明けに北キャンプを経由する道を出発した。まだそう遠くへ行く前に丘の上から敵が銃火を浴びてきた。彼らは敢えて平野に踏み出すことをせず、起伏の多い地形の特徴を利用したのである。戦隊がポロ・グラウンドに通じる道路に到着したとき、ライト大尉は敵が平野に集合しており、突撃を可能とするために速度を速めているという情報を受け取った。しかし、部族民は騎兵隊を見て丘に逃げ込み、幸運にも狙いの定まらない銃火を絶え間なく放っただけであった。やがてバツケラの村に到着し、その先にアマンダラ峠が見えてきた。これは谷の南側から中央の流れが速い川まで延びている長い尾根の切れ目である。そのとき川は流れが激しく手に負えなかったため、チャクダラへ行くには尾根の上か、間を通るしかなかった。しかし峠は敵によって守られていた。

おそらくマラカンドではまだ誰も知らなかったことだが、ライト大尉はこの時まで敵の数が膨大であることに気づいていた。マラカンドからアマンダラに至るまで、すべての尾根と丘の上には旗が翻っていた。騎兵に攻撃されない場所であればどこにでも彼らは密集した。墓地「墓地は辺境の景観においてよく目にする目立った特徴である。そのうちのいくつかは非常に広大で、すべては非凡な尊厳を持っている。」と峡谷と村に男たちが群がっていた。その姿はあらゆる方向にあった。アマンダラ峠のはるか向こうから、さまざまに兵力の部族民の群れが旗を掲げ、攻撃に急行してくるのが観察された。しかし、これらの恐るべき兆候は騎兵隊員を怖気づかせるにはほど遠く、チャクダラがいかに重要かということを目の当たりにして、いかなる代価を支払ってでもそこを強行突破する決意を固めさせただけであった。

道路の右側の墓地から降る弾の雨の下、簡単な協議が行われた。アマンダラの隘路は両

側を敵に占領されていた。おそらく十数人の兵士を失うが、戦隊は全速力で駆け抜けられるであろう。しかしこれは倒れた者が放置され、拷問と肉体損壊の末の惨めな死を迎えることを意味していた。負傷者を収容しようとするなら戦隊の全滅につながるであろう。他に方法がなければそこを駆け抜けなければならず、負傷者は放置されることになる。何らかの代替手段が望ましかった。そのときあるスワールが川の土手に沿って岩を迂回する道があると云った。ライト大尉はそちらを取ることにした。

道は悪かった。尾根の約半分を通過した後、それは急峻な白い岩によって突然途絶えた。実際のところそれは現地人が「ムサックス」（膨らませた革）を浮かべて川を渡っていた場所への道であった。今戻るとは失敗を意味した。ためらうことなく、どうにか通り抜けられることを信じて、騎兵らは右側を向いて丘を登り、岩の間を行った。歩いて移動するのすら難しい路面を通り過ぎた後、左側に峡谷が見えた。それはあたかも尾根の反対側に開けた平地に通じるかのようにであった。四〇頭の馬がひしめき合っている峡谷を下り、道を選ぶ余地もなく争って岩から岩へとジャンプした。明らかに騎手たちが意識していたように、敵が突然現れた場合には彼らの命は馬たちの利口さにかかっていた。

峠を保持していた部族民は戦隊が右側の川に向かって速足で逸れるのを見ると、すぐに彼らがチャクダラへ抜けるために決死の努力をするつもりであることを理解した。彼らは地形がどのようなものであるかを知っていたので、十分早くそこに着くことができれば敵を全員倒せると確信し、尾根沿いに急いで走った。それは競争だった。最初の部族民は、騎兵隊が峡谷にいる間に攻撃するの間に合った。彼らは将校がリボルバーを使用できるほど近くまで接近してきた。しかしパシヤン人は息切れしており、ひどく銃撃された。数頭の馬が襲われた。その中でもライト大尉の馬は大きな太ももの骨を貫かれたが勇敢にも持ちこたえ、騎手を無事にチャクダラに運んだ。

馬の素晴らしい活躍により、敵の力が集中する前に岩を通過することができた。しかし、すべての兵員をがっかりさせたのは、溪谷が平原ではなく、川の支流に通じていたことであつた。騎兵隊の前にあつたのは深さが不明で幅が広く流れの速い水路であつた。しかし、戻るとは今では問題外であつた。彼らは突っ込んだ。第一一ベンガル騎兵隊はおそらくどんなインドの現地騎兵連隊よりも優れた馬の乗り手である。彼らの強い馬は、流れに逆らって頑張り抜いた。数人はほとんど流されそうになった。ライト大尉は最後に渡った。この間ずっと敵は発砲しながら近づいていた。やがて渡渉が成し遂げられ、戦隊は馬が膝まで沈む水田の島に集まった。これの向こうに幅約五〇ヤードの川の別の支流が流れており、明らかに最初のものとはほぼ同じ深さであつた。敵の弾丸は、四方に「水の閃光」を作つた。この二番目の急流を通過した後、戦隊は再び敵と同じ側の川岸にいることに気付いた。彼らは沼地にいた。ライト大尉は部下を下馬させて銃撃で応戦させた。それから彼は

振り返り、再び流れに戻って、他の馬よりも小さなポニーに乗っていたため水の力に脚をとられていた病院助手を救助した。この後行軍は再開された。戦隊の行く路面はずっと重く、ひどい悪戦苦闘が展開された。田んぼの端に沿って走る敵は、絶え間ない発砲を継続し、良く狙いをつけるために膝をついた。一人のスワールが手を上に放り出して倒れた。背中を撃たれたのである。さらに数頭の馬が撃たれた。そして別の兵士が鞍上でぐらつき、地面に崩れ落ちた。停止命令が出された。下馬の上、敵に銃火が開かれた。負傷者は拾い上げられた。そして徐々にチャクダラが近づいて来て、ブリッジヘッド・マキシム機関銃が部族民に引き揚げを余儀なくさせた。「この件の詳細については、その危険を共有した第二ボンベイ擲弾兵隊のベイカー大尉に世話になった。」

こうして砦の守備隊は必要な補強を受けた。私がこの雄々しい騎行についてやや長く記述したのは、それが勇敢な兵士と良い馬を止めることができる障害物などほとんどないことを示しているためである。ライト大尉はチャクダラの指揮を引き継いだ。彼はラトレイ中尉に防衛の指揮を委ね続けることとした。防壁の後ろでの戦いは騎兵が精通していない戦闘局面だからである。

一一・三〇に日中の暑さの中を部族民は再び攻撃してきた。彼らは砦の北側と東側を囲み、押し入ろうと奮闘した。彼らは防御側の小銃射撃によって大きな損失を被り、死者が進上路に厚く折り重なった。またしても彼らは日暮れまで回収されなかった。狂信によって分別をなくした多くのガジが旗を掲げて銃火をもとめせず押し寄せ、まさしくその壁の下に弾丸で穴だらけにされて倒れた。

マラカンドと通信することは今ではほとんど不可能であった。ヘリオグラフ（*日光反射通信機）にたどり着くにはオペレーターがひどい銃火にさらされる必要があった。夕方、信号塔は石の胸壁に守られて絶え間ない一斉射撃を続ける男たちに囲まれ、全ては晒されておろ、ほんの一瞬ですら危険であった。

正午、主な攻撃の反撃の後、信号塔の警備は六人の兵士によって強化され、食糧と水も送られた。この困難な作戦をマキシム機関銃と自分の持ち場を離れることができるすべての守備隊員の銃火が援護した。八月一日までこのようにして水が毎日信号塔に送られていた。距離は長く、道路は急勾配であった。敵の銃火は持続していた。ともかくこの場面に於いて物資の供給ができていたのは素晴らしいことである。

夜が近づき、防御側は新たな攻撃に対応する準備をした。ウィートリー中尉はその後ろにいつも敵が集まる地点を観察し、日光がある間にその上に砦のマキシム機関銃と九ポンド砲の照準を合わせておいた。午後一一時部族民は叫び、わめき、ドラムを叩きながら前

進してきた。砲とマキシム機関銃が発射され、七〇人以上の敵が一回の発砲で死亡したと言われている。とにかく、攻撃は一時半遅れた。守備隊は終日持ち場に留まっていた。彼らは今少し休むことが望ましかった。しかし、一時に北東の角で新たな攻撃が起こった。再び敵はハシゴを持ち出し、必死に猛って突撃してきた。そして撃ち倒された。

その間すべての余った時間は駐屯地の遮蔽を改善するために使われた。ベイカー大尉は自らこの仕事に当たり、あらゆる手段を行使した。丸太、砂袋、石、土を入れた箱が壁の上に積み上げられた。人命の損失が大きくならなかつたのはこれらの予防措置のおかげである。

継続的な射撃が二八日に行われ、午後五時三〇分に再び敵襲があつた。まず彼らは以前の攻撃の時のように自然の遮蔽物と、闇に紛れて砦の周りに建てた石の胸壁の間の開放空間を少しずつダッシュして、三々五々前進してきた。これらの一部は防壁から二〇〇ヤード以内にあつた。彼らが接近するに従つて銃火は激しくなつた。その後、総攻撃がかげられた。砦の騎兵隊が保持している方面をぐるりと取り囲んで大きな半円状に国境のすべての部族を代表する二〇〇近くのきらびやかな色の旗を掲げ、彼らは壁の直前まで突進してきた。そのうちの数人は実際に絡まつた有刺鉄線を通過して囲いの中で殺された。しかし、すべての労力は守備隊に打ち負かされ、そして朝にかけて攻撃は徐々に消え去り、通常の狙撃手だけが残つた。彼らの中には特異な無謀さを示した者たちがいた。一人の男は有刺鉄線によじ登つて中に入り、近くのキャンプにいた防御者に二度発砲した後殺された。

同様の光景で木曜日の夜が明けた。守備隊は生じた間隙を防御を強化し、遮蔽を改善するために費やした。特にマキシム機関銃と野戦砲の台座への進入経路に力を入れた。午後三時に敵はチャクダラ村から出てきた。そして格別の努力をして壁をよじ登るためのハシゴと、有刺鉄線に投げかける草の束を運んできた。彼らは主に信号基地に対して攻撃を仕向けた。この建物は丈夫な四角い石造りの塔である。その入り口は地面から六フィート以上高いところにある。最上部の周囲には狭いバルコニーの一種であるマチコンリス回廊があり、床に発砲するための穴が開いている。これは良い銃眼である。四時、それは近距離から襲われた。砦の守備隊は銃火によって塔の守備を助けた。敵は大胆にも防御側の小銃射撃の下に突入し、入り口から約三ヤードのところの大きな草の山に火を放つた。炎が上がつた。残忍な喜びのわめき声が上がつた。しかし実害がなかつたのを見て部族民に沈黙が戻つた。日没時に砦のマキシム機関銃の照星が撃ち落とされ、防御側は一時的にその強力な武器の力を奪われた。しかし彼らはすぐに代用品を作り上げ、すべての実用的な目的に応えることができた。午後八時、敵は戦闘に疲れ、銃火は散漫な小競り合いへと次第に静まつた。敵は一晩中、死者を運び去るのに骨を折つた。しかし翌朝五〇体以上がまだ信号塔の周りに横たわつていた。彼らの損失は莫大であつた。

三〇日の朝にも戦鬪が停止することはなかったが、前夜の敗北に落胆した敵は午後七時まで攻撃して来なかった。その時間になると前進してきて新たな奮闘をした。そして再び撃退された。おそらく読者は単調な攻撃と反撃の連続の長い物語にうんざりしていることだろう。しかし守備隊は実際にどのような状況にあったのか？彼らは一暇を見て数時間の睡眠をとるこの日まで―九六時間も戦い、監視し続けていたのだ。水漏れのする船に乗って絶え間なくポンプの汲み出しに骨を折っている男たちが、疲労が増し、船が一時間ごとに沈んでいくのに気付いたときのように、彼らは助けが期待される方向へ不安な疲れた目を向けた。しかし、誰も来なかった。そして溺死よりも悪い死もある。

兵士は銃眼で、そして野砲の任務中に眠りに落ちた。攻撃の進行中でさえ、無礼な自然現象はそれ自身を主張し、兵士たちは小銃射撃の咆哮や敵の野蛮な姿から、完全な疲労困憊による平和な無意識の中へと漂流した。やつれたが疲れ知らずの将校たちが頻繁に彼らを起こした。

他の時であれば勇敢なセポイは絶望したであろう。砦は敵に囲まれていた。マラカンドも襲撃された。おそらく他の場所も同じだろう。英国領インド帝国全体が一つの大変動によって消滅してしまったようだった。将校は彼らを励ました。女王陛下の政府は決して我らを見捨てない。我らが持ちこたえることができるならば救助されるであろう。そうでなければ復讐を受けることになる。彼らを率いる若い白人への信頼と、恐らく彼らの首領であって、必ずや彼らを守ってくれるであろう神秘的な君主への海を越えた漠然とした半崇拝的信仰によって彼らは僅かに残った力を回復した。戦いは続いた。

包囲戦の間中、マラカンドとの信号伝達を維持することは極度に難しくなっていた。しかし信号通信士の英雄的行為はそれに勝った。特にセポイ・プレム・シンは命の危険を冒して毎日塔の円窓から出てヘリオグラフを立て、近距離からの恐るべき銃火のもとで主力部隊に緊急のメッセージを投げかけた。極端な危険、ヘリオグラフによって接続を取得する操作の繊細さ、消費時間、必要な沈着さの組み合わせによってこの前後のページに記録されたものと同等の勇敢な行動が成し遂げられた。「最近、ビクトリア十字章をそれに値する現地人兵士にも与えるという提案がなされた。そのような勲章の価値は、英国のすべての臣民に開かれたものにするによってさらに高められるに違いないと思われる。競争が激しいほど、成功の名誉は大きくなる。スポーツ、勇氣、そして神の視座においてはすべての人間の条件は平等である。」土曜日の早朝、水が信号塔の警備隊に送られた。その後、月曜日の午後四時三〇分まで補給はなかった。

砦への攻撃が開始されたとき、敵はおそらく一五〇〇人に達していた。それ以来彼らは

八月一日と二日まで毎日増加しており、一二、〇〇〇〜一四、〇〇〇人の勢力であったと推定されている。事態は今やさらに重大な局面を呈し始めた。三日の夕方五時に砦の東側に猛烈な勢いで新たな攻撃がかけられた。しかしそれはマキシム機関銃と野戦砲によって大きな損害被って撃退された。一晩中発砲が続き、日曜日の朝にはこれまでよりもはるかに多数の敵が現れた。彼らはいま一棟建ての民間病院を占拠し、壁に銃眼をつくり、そこから小癩な発砲を続けていた。彼らはまた信号塔につながる小尾根を占領し、これによって守備隊とのすべての通信を遮断した。その日、不幸な兵士たちには水が届けられなかった。天気は猛暑であった。尾根からの発砲はすべての内部交通を困難かつ危険にした。敵はマティーニ・ヘンリー・ライフルとスナイダー銃で大規模に武装しており、小銃射撃には最も悩まされた。塔の小隊は水を求める緊急の信号を送り続けたが、水は供給できなかった。状況は危機的になった。ラトレイ中尉の公式レポートの簡単な言葉を引用する――

「事態が非常に深刻になったため、緊急の救助を要請することにした。しかし信号発信の困難と危険性のために長いメッセージの送信はできず、極力短く、ただ二つの単語だけを送信することにした。“H e i p u s.”」

それでも守備隊は決死の戦いを繰り広げ、部族民は尾根、民間病院、隣接するヌラーを占領したが、防御の内側に足を踏み入れるものはなかった。

やがて、闘争の最後の日がやってきた。敵はいかなる代償を払ってもその場所を奪取すると決意したらしく、明け方に途方もない数で襲撃して来た。彼らはハシゴと草の束を運んで来た。発砲が激しくなった。要塞は遮蔽されていたが、砦に向けて降りかかり、すべての方向の防壁を傷つけた弾丸の雨によって数人の兵士が死亡し、負傷した。

事態に危機が迫ったそのとき突然、救援部隊の騎兵隊がアマングラ小尾根の上に現れた。騎兵たちは強く、抵抗する者をすべて容赦なく追撃し、切り伏せた。彼らが川を挟んで砦と反対側の橋頭保に到着すると、敵は反転して逃げ始めた。包囲の間、守備隊は頑強に死に物狂いで持ちこたえていた。救援が近づいた今、ラトレイ中尉はゲートを開け放ち、六人の兵士を引き連れて民間病院に突撃した。ベイカー大尉、ホイートリー中尉と他に数人があとに続いた。病院は奪還された。そこを占領していた約三〇人の敵は銃剣によって殺された。堂々たる仕上げであった。帰る途中、出撃部隊は騎兵隊―第一ベンガル槍騎兵隊―が部族民でいっぱい胸壁のところを阻止されているのに遭遇した。彼らはその側面に突撃して占有者のほとんどを殺し、続けてその残りも敗走と破滅に追い込んだ。最後に胸壁を去ろうとした男はラトレイ中尉の首を撃ったが、軍事的行動と同様に身体能力においても際立つこの将校は彼を切り倒した。これにより戦いは終わった。これより適切な結びは思いつかない。

包圍戦の犠牲者は次のとおり――

	死亡	負傷
第一一ベンガル槍騎兵隊……	一	一
第四五シーク隊……	四	一〇
ディリ徴税所……	一	〇
その他……	一	二
合計、すべての兵士――	二〇	

これが損失であった／＼しかし砦のすべての兵士は七日七晩の間、死と隣り合わせであった。

騎兵隊の馬はずっと敵の銃火にさらされていたが、ほとんど殺されたり負傷したりしなかったというのは重要な事実である。部族民は砦が自分たちのものになることを確信し、これらの素晴らしい動物が生きたまま彼らの手に落ちることを望んでそれを撃つことを差し控えたのである。

注意深い公式の調査で確認できる限り、敵はチャクダラへの攻撃で二〇〇〇人以上の損失を被った。

「弾薬の消費に関する以下の統計は興味深いかもしれない――

	発
七月二八日 マキシム機関銃……	八四三
マティーニ・ヘンリー……	七二七〇
七月二九日 マキシム機関銃……	六六七
マティーニ・ヘンリー……	四〇二〇
七月三〇日 マキシム機関銃……	一二〇〇
マティーニ・ヘンリー……	五五三〇
七月三一日 マキシム機関銃……	一八〇
マティーニ・ヘンリー……	二七〇〇

これは一人あたり一日約二〇発である。射撃統制が優れていたに違いない。」